

通し番号	4957
------	------

分類番号	30-C8-32-05
------	-------------

神奈川県における貝毒プランクトンの出現状況について	
<p>【要約】 本県では貝毒安全対策として、貝毒検査と貝毒原因プランクトンのモニタリングを行っている。これまでに本県では麻痺性貝毒プランクトンは確認されていないが、東京湾側における下痢性貝毒プランクトン<i>D.acuminata</i>の出現状況について、水深0 mで細胞密度が高いこと、2017年度により多く出現したこと、冬季～春季には細胞密度が低いことが確認された。今後、貝の毒化のリスクをさらに下げするためには、今回の結果と水温や採水地点の特徴などの環境条件について併せて検討していく必要がある。</p>	
神奈川県水産技術センター・栽培推進部	連絡先046-882-2314

#### 【背景・ねらい】

アサリやカキ、ホタテガイなどの二枚貝は毒性を持つプランクトンを摂取することで毒化することが知られており、日本国内で主に確認されている貝毒は麻痺性貝毒と下痢性貝毒の2つである。本県では二枚貝養殖等の振興を図っているが、食の安心安全の観点から、貝毒安全対策として2015年度から徐々に調査地点を増やして、二枚貝の貝毒検査と貝毒原因プランクトンのモニタリングを行っている。そこで、6地点で本格的にモニタリングを開始した2017年度以降のデータから、本県・東京湾における貝毒原因プランクトンの出現状況について整理した。

#### 【成果の内容・特徴】

- 1 本県では麻痺性貝毒プランクトンである*Alexandrium*属及び下痢性貝毒プランクトンの*Dinophysis fortii*は確認されなかったが、同じく下痢性貝毒プランクトンの*D.acuminata*は調査を行った全地点で確認された。
- 2 *D.acuminata*はほとんどの場合、水深2 mよりも0 mでの細胞密度が高く、2018年度よりも2017年度の細胞密度が高かった。
- 3 12～4月にはいずれの調査地点においても*D.acuminata*はほとんど確認されなかった。
- 4 2017～2018年度の*D. acuminata*の最高細胞密度は浦賀（2017年6月）及び本牧（2017年8月）における5,500cell/Lであったが、貝毒発生基準値（ $\geq 500,000\text{cell/L}$ ）を超えることはなく、同時期に実施された貝毒検査もすべて不検出という結果になった。

#### 【成果の活用面・留意点】

- 1 *D.acuminata*が水深0 mでより多く出現したことから、収容するかご等の水深を工夫することで同種による毒化のリスクを回避または軽減させる可能性が考えられた。
- 2 一般的に、*D. acuminata*の好適水温は13～25℃とされており、冬季～春季に多く出現する。しかし、本県では2017年度は夏季、2018年度は春季及び秋季に比較的多く出現し、年による環境条件の違いが調査結果に反映されたものと考えられる。
- 3 外洋水の影響を受けやすい湾口付近の調査地点の細胞密度が必ずしも低いとは限らず、今後は採水場所の位置（滞留しやすい・潮通しが良い等）の詳細な特徴についても併せて検討していく必要がある。

[具体的データ]



図 貝毒原因プランクトンの調査地点

図 下痢性貝毒プランクトン *Dinophysis acuminata*

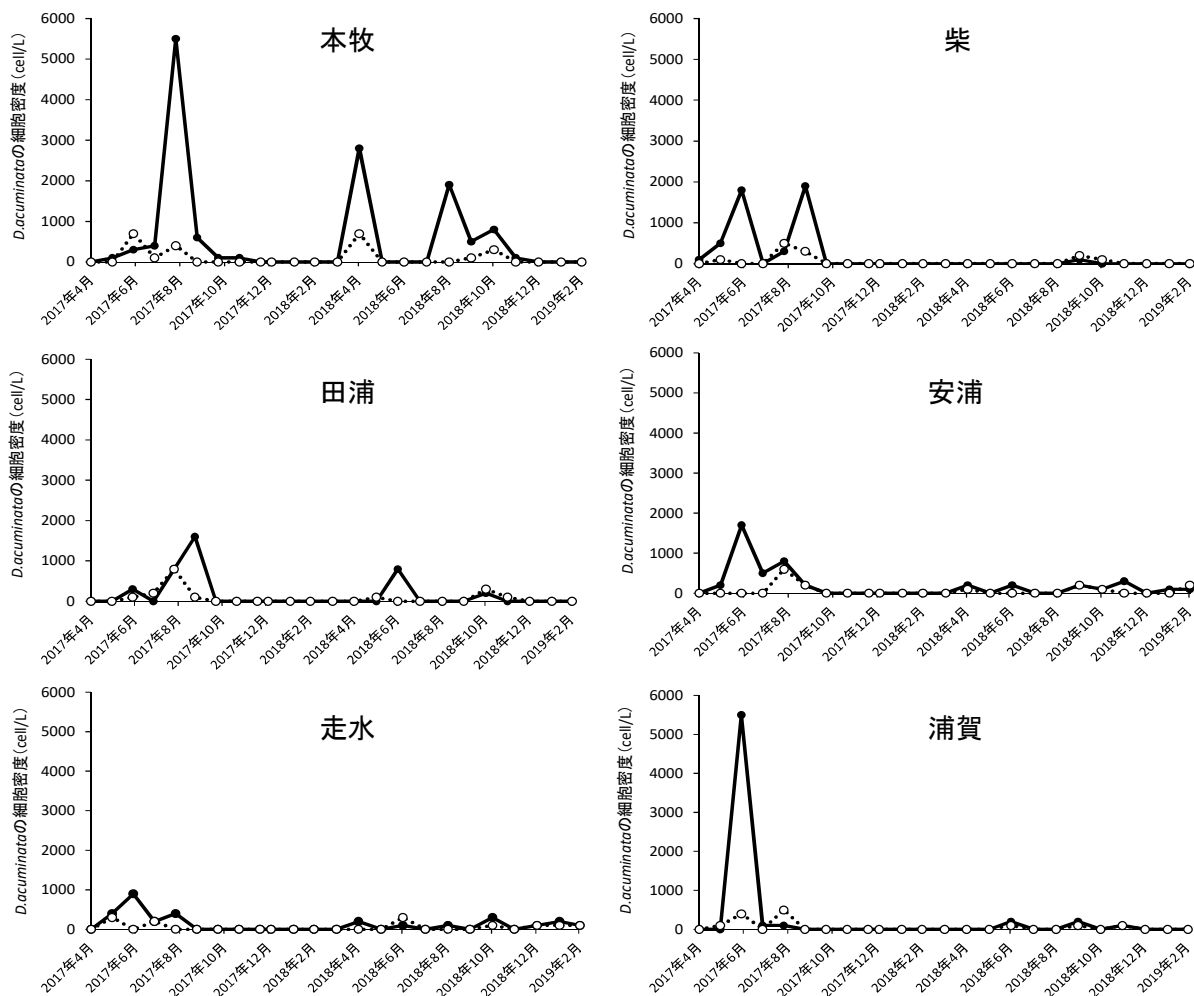


図 2017~2018年度の各調査地点における *D.acuminata* の細胞密度 (cell/L)  
(実線+黒丸：水深 0 m 点線+白丸：水深 2 m)

[資料名] 平成29~30年度業務概要

[研究課題名] 沿岸水産資源再生技術開発事業

[研究期間] 平成29-30年度

[研究者担当名] 草野朱音